



# 営農タイムリー！



## 発生予察情報について(11月)

2023年10月19日発行

### 病害虫発生予報第9号(11月)

京都府病害虫防除所より、11月の予察情報が発表されました。

#### 病害虫発生予察第9号(11月) (抜粋)

作物名	病害虫名	予想発生量 (平年比(前年比))	
野菜	アブラナ科野菜	べと病	やや少 (並)
	アブラナ科野菜	白さび病	並 (並)
	アブラナ科野菜	白斑病	やや少 (やや多)
	キャベツ	菌核病	並 (並)
	キャベツ	黒腐病	並 (並)
	アブラナ科野菜	コナガ	<u>やや多</u> (多)
	ネギ	ネギアザミウマ	<u>やや多</u> (やや多)
	ネギ	ネギハモグリバエ	並 (やや多)
	野菜類全般	シロイチモジヨトウ	<u>やや多</u> (やや多)

# 野菜

## 1. アブラナ科野菜 ベと病

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) キャベツをはじめ、**ハクサイ、ダイコン**などの各種**アブラナ科野菜**で発生し、アブラナ科野菜を連作した場合に発生が多くなる。
- (2) 気温が低く降雨が続く秋から初冬及び春先に発生が多い。
- (3) 肥切れすると発生しやすいので、肥培管理に注意する。

## 2. アブラナ科野菜 白さび病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 10月～11月の降雨が連続する時期に発生が多い。
- (2) 窒素肥料の過多を避け、水はけを良くする。
- (3) 過繁茂にならないよう適切な播種量を心掛け、間引きを徹底する。

## 3. アブラナ科野菜 白斑病

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年比やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨の多い年は、初秋から晩秋にかけて発生が多い。
- (2) 強風雨や泥のはね上げは、本病の伝染、まん延を助長する。
- (3) 肥切れすると発病を助長するので、肥培管理に注意する。
- (4) 多湿条件で発生しやすいので、ほ場の排水を良好にする。

## 4. キャベツ 菌核病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発病適温は20℃前後で、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
- (2) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壌中で2～3年間生存する。
- (3) 発病株は菌核を形成するまでに抜き取り、処分する。

## 5. キャベツ 黒腐病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、本病の発生を助長するので、早期防除に努める。
- (2) 降雨日数と発生量との相関が高い。

## 6. アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年比 多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間の発生回数が多く、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。
- (2) 雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- (3) 雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (4) 被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

## 7. ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年比やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) アイリス黄斑ウイルス(Iris yellow spot virus: IYSV)による病害でネギえそ条斑病を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

## 8. ネギ      ネギハモグリバエ

予報内容      発生量    :   平年並    ( **前年比やや多い** )

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- ( 1 ) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- ( 2 ) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- ( 3 ) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- ( 4 ) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。

## 9. 野菜類全般      シロイチモジヨトウ

予報内容      発生量    :   **平年比やや多い**    ( **前年比やや多い** )

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- ( 1 ) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。
- ( 2 ) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- ( 3 ) 本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。





# 今後注意すべきその他の病害虫等

## 野菜

### 1. トマト 黄化葉巻病 及び トマト 黄化病

**トマト黄化葉巻病**は、黄化葉巻ウイルス( TYLCV: Tomato Yellow Leaf CurlVirus)の感染により引き起こされる病気で、症状は、先端部の葉が内側に巻く、葉縁が黄化、株の萎縮等で、**タバココナジラミ**によって媒介される。

**トマト黄化病**はトマト退緑ウイルス( ToCV : Tomato chlorosis virus)の感染により引き起こされる病気で、症状は葉の一部の葉脈間が退緑及び黄化し、生理障害の苦土( マグネシウム) 欠乏の症状に類似し、タバココナジラミ及びオンシツコナジラミによって媒介される。

### 2. タバココナジラミ

**タバココナジラミ**は世界中に分布し、多くのバイオタイプ( 形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統) が存在する。本州では在来系統( バイオタイプJ p L等)、バイオタイプB、バイオタイプQ が確認されている。

バイオタイプQ は薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の3 点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「**総合的害虫管理**」が有効となる。

#### ◎ 施設内にコナジラミを「**入れない**」。

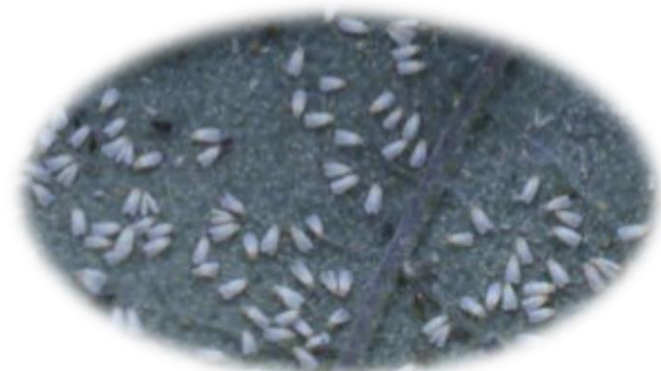
- ( 1 ) 開口部の防虫ネット被覆。
- ( 2 ) 黄色粘着ロールの展張。
- ( 3 ) 近紫外線カットフィルムの使用。

#### ◎ 施設内・施設周辺のコナジラミを「**増やさない**」。

- ( 1 ) 発生初期の防除の徹底。
- ( 2 ) 薬剤のローテーション防除の実施。
- ( 3 ) 天敵や微生物農薬の有効利用。

#### ◎ 施設内からコナジラミを施設外に「**出さない**」。

- ( 1 ) 開口部の防虫ネット被覆。



オンシツコナジラミ



タバココナジラミ成虫

タバココナジラミ幼虫



### 3. ネギ ベと病

9月下旬以降、平均気温が15 ~ 20℃で降雨が多くなると、ほ場にすき込まれた罹病残さ等に潜伏している病原菌の活動が再び活発となるので、本病の発生には十分注意する。